おこられた金沢さん

小倉芳彦

金沢さんにおこられた経験のある人は多かろうが、私は逆に金沢さんをおこったことがある。いや、正確に言うと、小倉クンにおこられたと金沢さんが言っているのであって、私自身はおこったという意識はない。それでも金沢さんがそう言っている以上、私が金沢さんをおこったことになるのだろう。今を去る三十年近く前、私の『日録』によると、一九六〇年四月二日、土曜日のことである。

その日の夕方、当時私が所属していた学習院高等科の教員室から、金沢さんのお宅に電話をした。用件は、その日の午後の緊急科会で、安倍能成院長の親臨のもと、磯部忠正科長の後任として浅沼早苗氏が高等科長になることが発表された、その大事を金沢さんに伝えるためである。

私より十歳先輩の金沢さんは、当時、大学の助教授を兼ねていたが、所属は私と同じ高等科だった。だからこの日の緊急科会に出席するはずなのだが、何かの都合で欠席された。そこでこの日のニュースを一刻も早く伝える必要があると考えたのである。

当時四十歳を出たばかりの金沢さんは、高等科の幹部連から一目も二目もおかれた気鋭の論客だったが、私たち若い者にとっては、話のわかる金離れのいい兄貴格で、こう言ってはなんだが、いわば敬愛の対象であった。とくに私とは、戦中戦後の本郷の大学で、学科こそちがえ、廊下の突当りの小使部屋で、新聞紙をひねって燃やしては微かな煖を取りあった仲である。もちろん金沢さんは大助手、私は一介の学生にすぎなかったが。それが学習院高等科でまたバッタリ出会ったものだから、二人の間には特別な親愛感があった(ように思う)。私の方から身辺の些事——中には人生の大事もあった——を打ち明けたりしたのもそのためである。

昭和三十五年度からの高等科の新体制について、欠席した金沢さんに私からいちはやく知らせたいと思った心情も、御理解いただけるかと思う。

ところがその電話口で、金沢さんはこちらの話もろくに聴かずに(とその時思ったほど)、急におこりはじめた。なんだかわからぬが、要するにお前はけしからぬ、というのである。だんだん聞いていると、お前は筑摩の松田氏に文句を言いに行ったろう、それはナマイ

キだ、という趣旨であることがわかって来た。

筑摩の松田氏のところへ行ったと言われれば、心おぼえはある。しかしそれは、文句を言いに行ったのではなくて、私の東洋史の先輩たちから伝えてくれと言われたことを伝えに行ったまでだ。それが先方の気にさわったかもしれぬが、そのことで私が金沢さんからおこられるいわれはない。私はそう思って、その趣旨のことを電話の向うの金沢さんに陳述した。

その陳述の調子が、平素温厚な(と見える)私に似合わず、かなりきつかったらしい。それが金沢さんには、私がおこっていると聞こえたようなのだ。

電話を切ったあと、この晩、私は畏友の同僚服部周一さんとのみ歩いた末に、帰宅するや、『日録』をこう書き出している。「思えば不愉快な一日であった。……」

親しいはずの金沢さんと話が行き違ってしまったことが、しこりとして残ったのである。

筑摩書房の、当時企画部長だった松田寿氏に「文句を言いに行った」一件とは、次のような事情である。以下、歴史の記録として、すべて実名で書くことにする。

一九五九年秋ごろから、筑摩書房で全十八巻の『世界の歴史』刊行計画が進行した。九月に東洋史の部分について、市古宙三氏を座長とする打合せの会があり、私を含めた八名が出席した。話合いの結果、中国三冊、インド一冊、西アジア一冊という配分になり、中国の三冊のうち古代の部分は、私が出した試案でなんとなくまとまった形になった。その線で五九年の年末から六〇年初めにかけて、執筆者への交渉も進んで行く。

金沢さんがこの筑摩の『世界の歴史』にどのくらいコミットしていたかは、正確なところわからないが、企画部の松田氏は、金沢さんと同じ西洋史学科の先輩・後輩の間柄であり、金沢さんのジャーナリスティックな才幹はひろく人に知られていたから、これは私の推測だが、金沢さんがかなり早い時期からこの企画に加わっていた可能性はある。

ついでに言えば、東洋史の市古さんも、金沢さんと同じ旧制浦和高校の二年先輩である。そんなこんなで、金沢さんと御縁の深い、同僚でもある私は、なんとなく、筑摩書房と東洋史関係の執筆者の間をつなぐ橋渡し役みたいな立場に立たされて行った。小生、三十二、三歳のころのことである。

二月十一日、木曜日、高等科の科会終了後のこととして、『日録』にこうある。

〃夜、金沢氏に誘われて筑摩書房へ行き、松田寿氏(企画部長)、や井上氏、吉崎氏と「世界史」の問題事項を相談。そのあと神保町の紅魚亭でのむ。うちまで送ってくれた。〃

さらに二月二十七日には、

〃五時から筑摩世界史の打合わせ会に学士会館へ行く。いつのまにかぼくが編集プランの責任者の如くなって、一々陳弁させられるハメになったのは心外。筑摩の担当者がなんらミのある連絡をしていなかった証拠。貧乏クジをひいてしまったようなものだ。〃

そしてほぼその晩に、第三巻「東アジア文明の形成」の執筆者、内

容、枚数がまとまったことが記されている。

ところがそこでトラブルがおこった。

時あたかも一九六〇年春、安保条約改定の是非をめぐって、国論沸騰しかけて来た時期である。研究者の間にも、この安保問題をどう考えるかによって立場が問われる切迫感があった。

三月九日の『日録』にこうある。

夕方、筑摩へ寄って、こんどの世界歴史の広告に民社党的色彩、安保改定賛成派的な色彩を出してもらいたくない、という意向がアジア史執筆者には強いことを松田氏に申し入れる。

西尾末広による民社党の結成は、この年一月二十四日のことである。「民社党的色彩、安保改定賛成派的な色彩を出してもらいたくない、という意向」が、アジア史の誰から私に示されたのか、残念ながら『日録』には記されていない。おそらく、執筆予定者のうち、かなり各方面の情報に通じた有力者が言ったのだろう。私がこれを松田氏に伝えたのは、この有力者が執筆をことわったりすると、企画全体が不調になることを慮かってのことであった。決して松田氏に圧力をかけたりするつもりはなかったし、私にそんな圧力がかけられるわけもない。

しかし問題はそれで止まらなかった。三月二十五日、隔週に開かれて私も出席している中国古代史研究会の折に、執筆予定者の一人増淵龍夫氏からこういう趣旨の発言があった。

西嶋定生氏から注意を受けたのだが、筑摩の世界史の出版予告が『読書新聞』に出ていて、編集者が林健太郎・猪木正道その他となっている。これは編集者名は出さないと筑摩がはじめに言っていたのとちがうではないか。この段階になって、この二人の名が出て来るのは困る。

この件については、研究会の一員で、執筆予定者の一人でもあった上原淳道氏も同意見で、私がすでに松田氏に申し入れたことを言うと、もう一度筑摩に言うべきだ、ついては今までの因縁から、使者は小倉がやれ、ということになった。

民社党的色彩云々は別として、置かないはずの編集者が突如として登場するのはおかしい。これは執筆予定者としては当然の疑問なので、私は翌三月二十六日、そのことを金沢さんに電話した上で、筑摩編集部の井上氏に電話した。

それから数日間、私は春休みを利用してそのころ準備していた論文の執筆にとりかかった。そして四月二日の緊急科会、科会後の金沢さんへの電話、となる。

金沢さんと私とのやりとりを、『日録』をもとに再現してみる。

——筑摩はキミが申入れたことでショックを受け、「東洋史はムズカシイところだ」と憤慨しているぞ。

——それは心外です。ボクは執筆者から苦情の申入れがあれば、筑摩側に伝える立場でしょう。東洋史がスネている、というように受け取られるのは心外千万です。

——でも松田はおこっている。

——今になって編集者の名を出すのはおかしいと言っただけです。当りまえでしょ。東洋史だから文句をつけてるわけじゃありません。

私はテンから金沢さんにおこられるようなことはしたはずがない、

と思っていたから、たとえ相手が大先輩でも、おこられたことにムキになったのだと思う。これが私のイキがりの青いところだ。金沢さんがこの時、これに輪をかけておこらずに、「小倉クンにおこられた」ことにしてしまったのは、やはり金沢さんの老練であり、私の負けである。

この時の行き違いは、近いうち三人で話し合おうということで納まったが、実はその後、松田氏と会う機会は一度もなかった。話はそれで終っていたのである。

一九六〇年春、という戦後日本史のなまぐさい背景の中で、金沢さんと私との一刻のやりとりは、忘れ得ぬ記憶として私の中にしまわれている。